

巻頭言

第二ステージに移行する日本フラックス成長研究会

Moving up to the Second Stage of the Flux Growth Society of Japan

宋 戸 統 悦*

振り返りますと、数え切れないほどの化合物の単結晶を育成してきました。試した手法も多岐にわたりますが、その中で私が最も心引かれたのはフラックス法です。大掛かりな装置も必要なく、ビーカーサイズで行える育成法ですが、溶液中に結晶の核が発生し成長していく様は、まるで無の状態から有が生じ、それが発達していく小宇宙のようです。

私は相当数の新化合物をフラックス法を用いて発見してまいりましたが、この事実を大変重要と考えております。すなわち、新化合物の合成手段としてフラックス法は卓越した能力を保有しているということです。殊に、分解溶融型の未発見の化合物はかなりの数で潜在していると考えられますが、溶融-凝固法では決してそれらを捉えることは出来ません。溶媒を関与させて、比較的低い温度域で結晶育成を行うフラックス法を適用することで、初めてそれらの新化合物を手にすることができます。このことに限らず、フラックス法は極めて多くの可能性を秘めた優れた結晶育成法であると考えております。

さて、2006年12月に発足をみた日本フラックス成長研究会は、この2010年12月に5周年記念大会(於信州大学)を迎えます。核発生から初期の成長段階を終えて、これから一層の成長を遂げていく段階に入るわけで、会は草創期を脱し、第二ステージに移行する時期を迎えたと理解いたします。この重要な節目に当たり、立ち上げの精神と理念を再確認し、溶液からの結晶育成を中心にした“知と技術の創造と継承”，“外部への成果発信”が堅実に進められていくことを心より念願いたします。特に大石会長が、会の更なる発展を目指して様々な企画を練っておられます。学会への昇格も必ず実現すると信じております。

会の“生命力”はひとえに私たち会員の密接な連携と、会への積極的な関与の姿勢に掛かっております。私もそのことを一番に意識し、この会が“おおらかに”，“力強く”成長していくように力を尽くさせていただく所存です。



*Toetsu SHISHIDO, 東北大学